生者と死者をつなぐ〈絆〉
——死者ヴィジョンの意味するもの——

大　村　哲　夫

「おばあさん！」と少女はさけびました。「わたしをつれていってちょうだい！」
Hans Christian Andersen, 1848, *Den lille Pige med Svovlstikkerne*

Ⅰ．はじめに

すでに死んでいる人の姿が見えるという現象がある。それは夢の中であったり，病が篤く意識水準が低下した場合であったり，人生の終末期などさまざまな状況下で死者ヴィジョン[1]は私たちの前に立ち現れる。

筆者は，臨床心理士という立場で，本人にしか見えない死者の姿「死者ヴィジョン」を見た人の話を聴く機会があるが，精神症状としてその現象を診る他に，死者ヴィジョンを見るということが，本人や周囲の人にとっていかなる意味をもたらすのかに注目している。そしてそうした現象に意味を与えている文化的背景に関心をもってきた。死の床における死者ヴィジョン出現の問題については，「死者のヴィジョンをどう捉えるか—終末期における死の受容とスピリチュアル・ケア—」(大村哲夫2010) において，死者のヴィジョンと仏の来迎の関係については，「臨死のヴィジョン：なぜ仏が迎えに来たのか—『往生要集』にみる聖衆来迎のイメージと念仏」(大村哲夫2009) などでも論じてきたところである。

本稿では，こうした死者の姿が見える現象を紹介し，それがどのように受け止められているかについて考察し，死者ヴィジョンが生きている私たちと死者との間をつなぐ〈絆〉としての役割を担っていることについて論じたい。なぜなら人間は死後，生者と没交渉となるのではなく，生前同様，時には生前以上

1　「死者ヴィジョン」とは，周囲の人にとっては幻覚・幻視であるかもしれないが，それを見た本人にとっては「事実」である。従って筆者は，敢えてそのいずれにも与しない中立的表現として「ヴィジョン (vision)」を用いている。

に生者の人生に関与し続けるからである。実際，自分と深い関わりのある人の死によって，その後の人生が変わったという事例は少なくなく，死後も死者は生者のうちに内在し，生者の判断に影響を及ぼしているのである。以下，できるだけ具体的な事例を紹介しつつ考察を試みたい。なお事例の扱いについては，本人が特定できないよう倫理上の配慮を加えている。

Ⅱ．さまざまな死者と話者の受け止め

事例1　月見に誘う死者

80代女性。主訴：不眠。

死んだ夫が枕辺に現れ，月見に誘う。怖くて眠れない。

話者の受け止め：

なぜ怖いのかをセラピスト（筆者）が訊ねると，「夫は仕事人間。月見に誘うような人ではなかった」とのこと。今になって誘いに来たのはどうしてだろうと，セラピストと一緒に考えていく中に，「生前は忙しくて余裕がなかったが，今は違う。私（話者）が寝たきりとなり退屈しているのを知り，誘いに来てくれたのだ」と思い至り，受容。以後安眠。

事例2　亡母？それとも

30代男性。母の死から1年後のエピソード。

ベッドの傍らに白く輝く服を着た人の姿が浮かび上がった。その姿が見え続けている間，話者の身体は全く動かすことができず，横になったまま身体が宙に浮いた。極度の緊張でびっしょりと汗を掻いた。

話者の受け止め：

姿が見えた時，「床に付いたばかりで，まだ眠っていないのに」と不審に思った。目を凝らして見るとその姿は，母のように見え，また絵画で見るキリストの姿のように見えた。また見ようによっては白衣観音のようにも見えた。霊魂の存在を信じてはいなかったものの，金縛りと空中浮遊とが

相俟って，恐怖とも言える強い感情を抱いた。

事例3　死者からの拒絶

50代女性。母が蜘蛛膜下出血で他界。話者も検査の結果，多発性動脈瘤3個発見され経過観察中のエピソード。

エピソード1：

祖母（故人）が寝ていた部屋から，死んだはずの祖母が「○○さん，○○さん」と近所の人の名を呼んでいるのが聞こえた。話者は，祖母が死んでいるにも関わらず声を出して呼んでいることには不思議に思わなかったが，○○さんは亡くなったばかりであったので，祖母にそのことを伝えようとして「祖母ちゃん」と呼び掛けた。すると祖母は話者に，「お前は来（く）っことない!!」と大変厳しい口調で言ったので，目が覚めた。

エピソード2（夢）：

話者が軽トラックを運転していると，離れた場所にある家の田圃に，祖母と隣のお婆さん，知人のお婆さんの三人（いずれも故人）がいた。歩いて登ってくるので，後で送って上げようと思い「待っててね」と声を掛けたところ，祖母が「来なくていいよ」と応えた。

エピソード3：

エピソード1，2の後，話者が鎮守社の夏祭りで盆踊りをしていた時，気分不快を覚え帰宅し，安静にして寝た。その日は土曜日だったので，病院にも行けず，日曜日も安静にしていた。月曜日に，予定していた診察のため通院したところ，待合室で蜘蛛膜下出血発症。そのまま入院，手術。経過良好。退院。

話者の受け止め：

亡父母も夢に現れるが，黙って見られている感じで話しかけてこない。「死んだ人はしゃべらない」と聞いていたが，祖母は声を掛けてきて特別だった。エピソード1では，「なんでそんなに厳しく言うのだろう」と祖母

が既に死んでいることには疑問は生ぜず，厳しさが印象に残った。祖母は出稼ぎに出ている男達の代わりに，家を守り仕切ってきた中心人物だった。「来る必要ない」と言われたことは，話者が跡取り娘であり「家を守るためにもっと頑張れ。そのために寿命をやる」と言われたと受け止めている。このエピソードの後，「御先祖様のお蔭」「生かされている」と，さらに信仰（浄土真宗）を深めた。また鎮守の祭礼で発症しタイミング良く治療に結びついたことは，「神様のお蔭」と思った。さらに東日本大震災に罹災し，津浪の危険を潜り抜け無事宅できたことも「お導きがあった」「御先祖様のお蔭」と感謝している。こうして護られてきた「御先祖様からの預かりもの」「ありがたさ」を，次の世代に受け継がせることが自分の役目と思っている。

事例4：死者の迎え1

60代女性。

「昨日も一昨日もなんだけど，女の人が二人来て，いたずらするの」。

話者の受け止め：

看護師が「（女の人は）知らない人？」と訊くと，「知っている人なの。母親（故人）と妹（健在）なの。夢じゃないの。これは現実なの。絶対」と答えている。さらに看護師が「お母さんはお迎えに来たのかしらね？」と言うと，話者は「そうなのよ。だから嫌だって言ったのよ」と「お迎え」を拒否した。

事例5：死者の迎え2

80代男性。

「ママが来た」

話者（本人の娘）の受け止め：

「昨夜は亡くなった母がベッドサイドに来たらしい」。「ママが来た」てはっきり見えたらしい。こういうのまったく信じない人だったのに，お迎

えってあるんですねぇ」この2日後，本人死亡。

事例6：死者の迎え3

小学五年生女児　東日本大震災後1年9ヶ月後のエピソード。

夢：

学校にいると，津浪で行方不明になっている祖父母が現れ，「こっちへおいで」と言われた。

話者の受け止め：

不安になり頭痛や腹痛を生じ，登校を渋るようになった。

事例7：死者達と愉しむ

80代男性（もと海軍士官）。

エピソード1「お地蔵さん」：

傾眠。声を掛けると直ぐ開眼。声が上ずりながらも次のエピソードを語る。

「（自分が）仏さんに近づいて，お地蔵さんと間違えてお賽銭を置いていくんだ」。「バスと電車の駅の近くに一杯飲み屋があって，そこでゆっくりするんだ，お姉さんがお銚子を持ってきてくれる」。「先に行くとお墓がある。子どもと一緒にお菓子を貰ったりするんだ」。

話者の受け止め：

不思議な話であるが，つい今あったことのようにセラピストに語る。「ここは天国だよ」と楽しそうなようす。

エピソード2「出航」：

声掛けに開眼。「下痢なんです」。

「船（軍艦）が出航する」「乗り込めと言われ乗り込んだ。どこへ行くか分からない」「今上陛下の命令」。「被弾して手術を受けた。まだ縫って貰っ

ていない」「夢なのか現実のことなのか分からなくなった」。セラピストに「新聞を見てきたんですか？」と尋ねる。「こんなボロ船じゃ，飛行機の二機ぐらいでやられてしまう」「退役軍人が集められたが，どうなっているか分からない。大きな決定が成されたようだ」。「私はもう10年前に死んでいるのに」。「若い女の人が乗り込んできてお産になり，私が取り上げたんですよ，どうしてか分からないけど」。「大砲が四発発射された」。

話者の受け止め：

緊迫した様子。今当に真っ只中にいるようで，セラピストと会話しながら非常事態が進行している。

エピソード3「お誕生会とお葬式」：

「お誕生会をしてくれた」「お父さん（故人）がやってくれた。初めて。申し訳ない。初めて父親から認められた気がした」「奥さん（故人）がいないのが玉に瑕。残念なのは家でやりたかった」。セラピスト〈どこだったのですか〉「ここ（施設），いや家だったかも。立派になっていて三階建て。気恥ずかしくて入れないぐらい」「俺の好きなお饅頭やお寿司が用意されていたが，幼馴染みや親戚がたくさんいたのでみんな食べてしまった。自分は食べられなかったが満足」「楽しかった。先生（筆者）も呼んであげたかった」「何だか僕のお葬式みたいだった。丸棺で」「夢だったのかな」。

話者の受け止め：

話者の母や祖母の話は今までよく話題に上ったが，「父」は今回初めて登場している。その父に「認められ」て嬉しそうである。

エピソード4「一本道」：

「学生さんがうろうろと迷っている。それを子どもたちがからかっているんだ。「一本道だよ」」。「この道は川に出合うんだ。川の水は冷たいんだ。この川がどこから来ているのか，近くの人に訊いても知らないんだ」。「道の先は火葬場」。「三階建ての家があってね。そこには幽霊やお化けがいるんだ（にっこりと微笑みながら）」。「引き返すことはできないんだ」

話者の受け止め：

にこにこして穏やかに語る。今までも海軍の学校時代の話題は多かった。「学生さん」とは，話者自身でもあるようだ。

事例8　川と橋と亡妻

高齢男性。1年前に妻を亡くし一人暮らし。一月前に亡妻の一周忌を行った。

「妻を看取ってから不思議な夢を見るので聞いてほしい」と，手帳とメモを見ながら話す。

夢1：

「子どもの頃暮らしていた田舎の風景によく似た山脈の前に，川が流れていた」

「渡れそうな川だった」。

夢2：

「また同じ風景の夢を見た」。「季節は変わって山は紅葉しており，川を渡って向こう岸へ行きたいと思ったが，流れが急で行けなかった」。

夢3：

「同じ場所にいる夢を見た」。「今度は川に橋が架かっており，渡ってみたが途中まで，もう少しと言うところで終わっており，向こう岸まで架かっていなかった」「橋はコンクリートで，何とか向こう岸へ渡れそうな気がしたが，無理せず戻ることにした」。戻ったところ「橋のたもとには○子（亡妻の名）がいた。寒いから「ジャンパ買いに行こう」と一緒に行った」。

話者の受け止め：

「本当に不思議な夢だった」「いったいどんな意味があるのでしょうね」。この2日後，交通事故に遭って死亡。

Ⅲ．考察

これらの事例は，筆者が採集している死者ヴィジョンの事例の一部である。こうした個人的体験のエピソードは，その性格上特殊条件において得られたものであり，一般的な考察を導き出すことは可能か，という疑問もあるだろう。しかしながら個々人の体験は，個人にとって紛れもなく重要なできごとであり，個人の人生に大きな意味を持っている。個別の例を分析し，各事例を比較検討することで共通して言えることについて，以下考察を試みたい。

1. 死者ヴィジョンの「事実」性

死者ヴィジョンとは，そもそも現実ではなく幻覚であり，論じること自体無意味ではないか，と言うこともできよう。しかしながら神秘体験や宗教的体験は，たとえそれが身体的・器質的原因による幻覚であったとしても，自分自身の目や耳で確かに見聞きした以上，体験者にとっては儼然とした心的「事実」である。したがって客観的事実と同様，あるいは特殊性ゆえそれ以上に，本人に強い影響を与えることができる。事例5の男性が，亡妻のヴィジョンを見て「ママが来た」と受け止め，それに対して娘が「こういうのまったく信じない人だったのに〔…〕」と述べていることからも，合理的判断より自らの体験が優先されて受容に至っていることが分かる。死者ヴィジョンを見た人は，その「リアリティ」によって死者から働きかけられ，その出現に意味づけをし，影響を受けている。

創唱宗教の創始者や偉大な宗教者の多くは，さまざまなヴィジョンを体験しており，自らが見たヴィジョンを重要なものとして受け止め，宗教的意味を付与し，回心や悟り体験として人生の宗教的転機を迎えたことは良く知られている。死者ヴィジョンの出現も同じく，それを体験した人にとって人生の転機となりうるエピソードである。

2. ヴィジョンとイメージ

筆者の臨床経験からみて，死者ヴィジョンを見た人は，写真のような明瞭なイメージ[2]（表象）を見ているのではなく，出現した曖昧な輪郭のヴィジョンに

2　筆者は，「イメージ（image）」を「表象」の意味で用い，日本で一般に用いられる「印象」，「虚構」などの意味を含めていない。

対して，「あれは何某である」と同定していることが多い。

事例2でも，「白い服を着た人」が見え，それに話者が「亡母」や「キリスト」，「白衣観音」のイメージを投影している。そして死者ヴィジョンの体験者は，その何某が現れたのは，「自分に何かを伝えようとしているからだ」というような意味をそこに読み取ろうとする。すなわち，自らの人間関係や人生経験などの個人的背景や，習俗・宗教を含めた文化的背景のもと，出現したヴィジョンに何らかの意味を付与することでイメージを同定している。意味を付与された死者ヴィジョンは，今度は逆に見た人に対して，何らかの影響（時には人生の方向付けを変えるような）を与えるといった見た人との間に相互作用がみられる。こうした相互作用によって死者ヴィジョンは，単なる「幻覚」などではなく，「心的事実」として見た人により影響を及ぼす神秘的で宗教的な「体験」となる。

3. 「親しい死者」

では現れた死者とは，いったい「誰」であろうか？

紹介した事例から見られる通り，事例1では「夫」，事例2では「母」，事例3では「祖母」や「（近所や知人の）お婆さん」，事例4では「母」，事例5では「妻」，事例6では「祖父母」，事例7では「父」，事例8では「妻」など，死者は未知の誰かではなく，「親しい死者」が多く出現している。

生前親密な関係を持ち，その死後も墓参や供養を続け，写真を飾る[3]などする日常的関わりを通して，身近な「存在」であることを保ち続けている死者が，現前しているのである。すなわち彼らは，ヴィジョンを見た人にとって，「一番会いたい死者」でもある。生前と同様，あるいは死者としての権威をもって，生前以上に生者の人生に影響を与え続ける「親しい死者」が，ヴィジョンとなって立ち顕れているのである。

4. 死者ヴィジョンと出会う場所

人が死者ヴィジョンと出会うのはどういう場所であろうか？

死者ヴィジョンを見て「お迎えが来た」ととる場合は，死者の方がこの世に出向いて来たと捉えられており，臨死体験で川を見るなどするのは，こちらから

3　鈴木岩弓（2010）は，飾られる人を〈意味ある他者〉と指摘している。

あの世の境へ出向いたようである。しかし筆者は，実際にこうした体験をした人からの聞き取りから，こうした「行き来」に違和感をもっている。というのは，死者が顕れるのは，遠いところから来た，というより，気が付いたらそこにいた，という語りがほとんどであるからである。臨死体験の場合も，気が付いたら川に来ていたり，お花畑にいたとすることが多い。来たり行ったりというのは，あくまでこの世を起点にした捉え方であり，死者ヴィジョンを見た人の語りではなく，それを聞いた家族などの受け取りである。こうしたことを踏まえ筆者は，「行き来」よりも生者と死者が出会った場所が問題であると考えている。すなわち生者が死者ヴィジョンと出合う場所は，生の世界と死の世界の混在する境界であると考える。事例7の男性は，身体はこの世にあり筆者と会話をしているのであるが，彼の魂はどうもあの世の人たちと一緒にいるようであった。事例8の男性のケースでは，夢という非現実の世界である上に，その世界も「子どもの頃暮らしていた田舎の風景によく似た山脈の前」の川，とこの世のようであってこの世でなく，あの世であるとも定まらない場所で，亡き妻と邂逅しているのである。

死者と生者の出会う場所は，死者の世界そのものでもなく，生者の世界そのものでもないマージナルな場所に存在し，そこで出会うことができるのである。

5.　死者ヴィジョンを見る意識状態

通常，死者ヴィジョンを見るのは夢の中である。それも寝入り端などの夢うつつの状態であることが多い。しかし事例2のように，話者は「まだ眠っていない」と感じたり，事例4の話者は「夢じゃないの。これは現実なの。絶対」と語っている。事例7では，実際に話者はセラピストと話しながらヴィジョンを見ている。終末期の患者の場合は，意識がありながらヴィジョンを見ることも少なくない。こうした現象を医学的には，睡眠障害や譫妄などの意識障害と説明している。たとえば事例2における「白い服を着た人」のヴィジョンや金縛り，空中浮遊体験は，「ナルコレプシー（Narcolepsy）」の症状と診断することも可能だろう。アメリカ心理学会が作成し，日本でも広く使われている『DSM-Ⅳ-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル』（APA，2000）によると「ナルコレプシーをもつ人のおよそ20-40％はまた，眠りに落ちる直前（入眠時幻覚）や目覚めた直後（出眠時幻覚）に強烈な夢幻様のイメージを経験する。〔…〕ナルコレプシー

をもつ人のおよそ30-50%はまた，入眠時または覚醒時に睡眠麻痺を経験している。このようなとき，その人は目覚めているが動くことも声を出すこともできないと表現する」(APA, 2000) としており，こうした症状は正常な人でも見られ，睡眠関連幻覚と睡眠麻痺は同時に起こることがあることも指摘している。そして「生き生きとした心象」と「骨格筋の弛緩」はいずれも，「レム睡眠の解離した要素が覚醒状態に侵入することによると考えられている」(APA, 2000) としている。

また沖縄のシャマン「ユタ」や，女性高齢者「オバァ」ついて現地調査した社会心理学者の大橋英寿 (1998) は，彼女らにおける死者たちと会話し交流する心理状態を，「変性意識状態 (Altered States of Consciousness)」としている。そしてそうした一見異常に見える意識状態に，一種の「自己治癒作用」があると指摘している。事例7の男性の場合も，こうした精神状況であったと考えられる。他者から見れば「認知症」の症状に過ぎないかもしれないが，本人はセラピストに「天国」と語っている。彼はこの世とあの世の混在する場所で，この世の人とは思えない人などと無心に屈託なく遊んでいるようで，筆者には羨ましい気さえしたのである。

6. ありがたい「お迎え」と迷惑な「お迎え」

死者ヴィジョンが見えた時，人はそれを死の予兆として捉えることがある。終末期の患者の場合は特に，「お迎え」が来たと受け止められる場合がある。

事例4，5，6の話者は，死者の出現をあの世への誘いと捉えている。事例5の男性は，「ママが来た」と肯定的な受容を示しているが，事例4の女性では，看護師の「お迎えかしら」という質問に，「そうなのよ。だから嫌だって言ったのよ」と「お迎え」を認めつつ，誘いを拒否している。事例6の少女も，大好きな祖父母であるものの，あの世への誘いには不安を覚え，心身の不調をきたしているのである。このように死者による「お迎え」と認識しても，見た人の受容は肯定と否定にわかれる。事例8の男性の場合は，一連の夢に「いったいどんな意味があるのでしょうね」と述べているものの，この話を聞いた人たちは男性の近い死を心配し，男性が実は死を意識していることを感じとっていた。またその男性の死亡を聞いた看護師たちは，男性の夢を「やはりあの夢は「お迎え」が来ていたのだ。悲しいことだが，今頃は亡き妻と一緒にいるのだろう」という

受け止めをしたのである。

死者ヴィジョンの受け止め方の違いは，「お迎え」という受容の仕方（「文化」と言ってもよい）を共有しているかどうか，死者と生者の関係はどうであったのか，生者の置かれている状況などによるものということができる。

Ⅳ．まとめ：死者と生者の〈絆〉としての死者ヴィジョン

既に死んでいる人の姿が見えるという現象は，睡眠時や覚醒時，入眠・出眠時，病気や終末期など様々な状況下で出現し，見た人によって意味づけられ，見た人に意味を付与する。これらの現象は，他者にとって「幻覚」に過ぎなくとも，本人にとっては自らの感覚によって体験した「事実」である。それは死者が顕現するという異常現象にも関わらず，自身の体験に基づくため，見た人にとって大きな意味を持つ現象となる。人はさまざまな現象に出会い，それを自らと関連あるものとして受け止める，すなわち「意味づける」ことによって自分の人生に取り込んでいる。それは決して合理的な受容に留まるものではない。

生者の前に現れる死者は，生前から親しく関わり，死後も墓参や供養などによって関係を続けている「親しい死者」である。このことも死者が生者に与える影響を大きくしていると考えられる。生前から親しい関係を続けていた死者は，死者となったがゆえに生者に対してより強い意味を与えることにもなるだろう。

またこうした死者ヴィジョンを見る場所は，気が付いたらそこに死者がいたり，気が付けば自分がこの世に似た世界にいて死者と会うなど，生者の世界と死者の世界の境界，マージナルな場所であり，そこで生者は死者と出会っていると考えられる。

死者ヴィジョンを見るときの精神状態は，睡眠前後や終末期など，意識水準が低下している状態と考えられるが，変性意識状態であるとみられる場合もある。変性意識状態には自己治癒作用もあり，死者ヴィジョンを見て穏やかな気分になる場合は，こうした作用によるものと考えられる。

親しい死者のヴィジョンは，生と死，現世と来世という生者には量り知れない時空の隔たりを超え，生者に働きかけてくる。「親しさ」による一種の安心を伴い，生者に示唆を与え，時にはあの世へも誘うなど，「生者」と「死者」をつなぎ，「この世」と「あの世」を結ぶ〈絆〉としての機能も担っているといえる。

印度学宗教学会第54回学術大会基調講演において，山形孝夫，村上真完両先生も触れられていた〈絆〉のもつ肯定的な側面と，それが手枷足枷となる否定的な側面との両面性は，死者ヴィジョンと生者の間にも見ることができるだろう。生きている人間間における人間関係の「暖かさ」と「厄介さ」は，相手の死に終わるものではなく，死後も形を変えて続いているのである。

附記1：本稿は，2012年6月開催印度学宗教学会第54回学術大会における大会企画シンポジウムにおける発表に加筆したものである。
附記2：本研究は，日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C 課題番号：24520906）の助成を受けている．

文献

American Psychiatoric Asociation, (2000), *Diagonostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition, Text Revision;* (『DSM-Ⅳ-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル』2004，医学書院)

Andersen, H. C., 1848, *Den lille Pige med Svovlstikkerne* (大畑末吉訳「マッチ売りの少女」1964『アンデルセン童話集（三）』岩波書店)

大橋英寿（1998）『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』弘文堂

大橋英寿（2000）「死のコスモロジー——地域社会と死生観」『意味の形成と発達』ミネルヴァ書房

大村哲夫（2009a）「臨死のヴィジョン：なぜ仏が迎えに来たのか— 『往生要集』にみる聖衆来迎のイメージと念仏—」『東北宗教学』第5巻

大村哲夫（2009b）「患者の思いと医療者の役割」『在宅緩和医療・ケア入門』薬ゼミ情報センター

大村哲夫（2010）「死者のヴィジョンをどう捉えるか—終末期における死の受容とスピリチュアル・ケア—」『論集』37号

鈴木岩弓（2010）「写真が語る現代人の絆」『いま，この日本の家族—絆のゆくえ—』弘文堂

Kizuna; Bonds of the Living and the Dead: What the Dead's Vision Means

Tetsuo OHMURA

There is a phenomenon that people see a visual image of the dead.

It appears in various circumstances such as in their dreams, in their declining years, or on their deathbed.

As a clinical psychologist, I often hear episodes of the dead's vision. I examine not only clients symptoms but also note how the dead's vision means to them, to thier family, and friends. I also have an interest in the background culture of this vision.

In this paper, I introduce some cases of people seeing a visual image of the dead, and discuss about how people accept them.

The dead's vision bonds to the living and the dead. Therefore people do not disconnect the dead, and keep its relationship because this *Kizuna* has something to do with the living.